

保育の現場から

## 保育の中の親支援

～乳幼児精神保健の領野から保育を考える～

前野當子

谷本恭子



気になる子どもへの支援の道すじは

親支援から

前野當子

昨年五月に開催された日本保育学会第62回大会プログラムの中に、『乳幼児精神保健と保育学』と題する自主シンポジウムがありました。<sup>注</sup>冒頭、企画者から、子ども心の健康を支えようとする乳幼児精神保健の見地から、保育の中に見出しうる諸問題についての討論を深めたいという趣旨説明がありました。

本稿は、話題提供者のうちの二人によるもので、同じ地域で連携しつつ、子どもを受け止めることのできる親に育ってほしいという願いをもって、子どもたちとの毎日をていねいに過ごしている実践者です。

従来、保育園は子どもたちの成長を年齢発達を基にして保育をしてきました。その時、気になる子ども姿の原因は、育ちの中の生活経験の弱さにとらえ、援助や指導をていねいにしていくことで多くの行動は解決できてきたと思っていました。

しかし、現在、多くの気になる子どもたちの行動は

単に、経験不足が子どもたちの心身の成長を妨げているという視点で見るとはなく、守られるべき乳幼児時代の親子関係に問題があり、信頼や安心できるかわりが不十分であるために、心理的な問題を混乱した行動として表して、信号を送っているのだと思えるのです。

子どもの信号は、抱いても身体が人に添えない、少しのことでキレル、攻撃的な暴言暴力、身体に触られることを嫌う、語りかけの言葉が響いていかないなど、さまざまです。子ども本来の明るさ、柔らかさ、愛らしさなどでなく、とがっていて激しく、不安定な危なっかしい症状を出すことで子どもたちは心の状態を保育士にぶつけてきます。

子どもの心の叫びは、私を、僕をかまっけてほしいという、幼く基本的な人とのつながりを求めている表現です。家庭でもって行きようのない反発と、切り替えのできない葛藤など、心のガスを保育園という場で吐き出してバランスをとっているように思います。

これらの混乱した行動の原因は、どこまでも子ども自身がつくったものではなく、親にあるということだと思います。しかし、親もさまざまな理由で混乱や余裕の無い気持ちのため、受け止めることができず、子どもの行動に対する理解が困難になっています。なぜ、親の言っていることが理解できないのか、なぜ、甘えてまとわりつくのかなど、子どもの心の叫びが理解できず、混乱した親の心はさらに、イライラした状態になります。そして、時には、目に見えた行動へのしつけのみでこのような心の荒れが収まるのだと思ひ、指導的、威圧的、また、無視した態度などで子どもに差し向かい、どこまでも子どもの心は満足されずに、厳しい状況に置かれてしまう事例を多く見てきました。また時には、精神的な問題や発達障害などを疑い、子どもに要因を押し付ける相談もあります。まずまず子どもは甘えることができず、安心し安定した親子の心の関係づくりがさらに未発達に置き去りにされて育っていき、心の反った行為で表現をしてくること

につながるのです。

この子育ての混乱はどの家庭にも程度の差はあれど、さまざまな状態で年々増加し、深刻な状態になっています。親の思いが先行し、子どもの思いをどこかに置き去りにして膨らんでいき過ぎ、うまく親子が組み合わないことで混乱の状態が厳しくなってしまうように思います。大人側の抱えたさまざまな理由や事情があった子育ての中では、誰もが混乱に陥る要素がある、その混乱は子どもの荒れとなって私たちに訴えているのだと思います。

いま、親子と毎日出会う保育園において、親子支援のあり方を考えさせられます。心のしんどさを吐き出し、甘えを受け止められ、安心と信頼がもてる場所であることが最も必要とされているのではないかと考えます。いま保育士は、子どもと向き合う時、子どもの表してくる行動は何を語っているのか共感しながら心の発達年齢を理解することが重要で、その目線まで下がった対応をすることによって子どもの心の育て直し

に近づくことができると思います。

また、いま親をどのように理解していくかということも大切です。一見問題点など表面上見えない保護者が、子育ての混乱を抱えている状態が最近増えているように思います。それだけ人とのつながり、関係の中で弱音を見せられない、また、相談することで傷つくことを恐れているなど、親もまた自分の生育歴の中で、つまずきをもっていたりします。親子の関係は一对であり、親の混乱は子の混乱であるという視点から、親を支えることで親のストレスのガス抜きができれば、親もまた子と向かい合う心の余裕が生まれるのではないかと思います。取り組んできました。思い悩みの状態を抱えている人ほど慎重であり、心の響き合いにいたる関係づくりに時間がかかります。

なかなか心の扉が開かない親に、薄皮をはぐように相手の懐に踏み入れさせてもらえる関係づくりは、特別なことではなく、日常の何気ない会話であり、雑談から始まることを実感してきました。さまざまな問題

も親との継続的な出会いの中から私たちが学ぶべきです。親だから子どものことを考えていくべきだという保育の方法では、単純な問答形式や説教で終わり一方的なかわりになりがちです。

母子への要求などを話すのではなく、毎日の出会いを大切に、「いってらっしゃい」など、笑顔でのあいさつと雑談の継続が相互の心の距離を少しずつ近くし、こちらが予想もしない相談を親から受けることもありえます。また、毎日の出会いの中でいつもと微妙に違う親子の姿に出会うと、何かあったのではと感じさせてくれ、気付きの感性を養ってくれました。それは親子の関係性障害になりうる混乱を鎮めるかわりがあり、虐待予防になる支え合いを私たちができるということです。自分の心にならずき、語る時間を一緒にもつてくれる人がいることで、母親は心の重荷のガスを抜くことができ、何かが変わっていくということです。

(高知市子ども家庭支援センター)

子ども家庭相談員)

## 高知聖園ベビーホームの養育と親支援

谷本恭子

乳児院「高知聖園ベビーホーム」では、〇〜三歳の子どもたち30名が養育困難や養育拒否、経済困難、虐待などの理由で親や家族と離れて生活をしています。

乳児院の役割として、親に代わる愛情を子どもたちに育み伝えることや傷ついた身体や心を癒すことがあります。そのため次の方法をとっています。

①養育担当制をとり、子どもとの間に親に代わる特別な愛着関係を築く。

②集団養育で個が埋没しないように、自ら欲求がいつばい出せる子どもに育てる。

③家庭に代わる役割を担うために、抱っこやおんぶ、一緒に入浴、添い寝などを行う。

これらを通して、子ども自身が愛されていると感じることのできるかわりを目指して養育しています。職員のかかわりが子どもたちに伝えられ、子どもたち

は自分の受けたかわりを他者に向けていきます。どんな育て方をされてきたのが問われます。良き世代間伝達が次の世代に受け継がれていくようにしたいと思います。

親子関係の構築や再統合のためには、親支援が重要な鍵となります。子どもへの接し方がわからない、子どもをかわいと思えない、虐待してしまうなどさまざまな状態の親がいます。その親たちは自分自身の生い立ちの中のトラウマや現在の生活に困難を抱えています。甘えられなかった子ども時代、虐待体験、いじめられ体験、差別感、孤独感、さまざまな人間関係の悩み、経済問題、さまざまなことが語られます。親や家族をできるだけ温かく迎え入れ、話を繰り返し聴いていきます。そしてトラウマ解決の糸口を見つけ、共感の中でトラウマを和らげていきます。

### 《事例、この子をかわいと思えない》

疲れ切った表情の未婚のお母さんが、生後二か月の

赤ちゃんを連れて「少しの間、預かってほしい」と乳児院にやって来ました。緊張が強く抱きにくい、視線の合わない、よく泣く赤ちゃんでした。お母さんは「この子をかわいと思えない。この子の顔が妊娠中に私を捨てた子どもの父親にそっくりだ」と……。この子を一人で育て、周りから『お母さんなのだから頑張らない』と言われてすごくしんどかった。もう頑張れない」「この子の父親は結婚しようと言ってくれ、妊娠したことを伝えた時、産んでほしいと言ってくれた。うれしかった。でも妊娠七か月の時、私の前から姿を消して、突然いなくなってしまった」「私は小学生の時、妹と一緒に養護施設に預けられていた。毎日、毎日、お母さんの迎えを待っていた。でも、お母さんは来てくれなかった。寂しかった。お母さんはアルコール依存症で自分や妹は怒鳴られたり、たたかれたり、風呂に顔をつけられたりと虐待を受けていた。それでもお母さんと一緒に暮らしたかった」。

そのお母さんはいろいろな心情を吐露してくれ赤

ちゃんは乳児院で預かることになりました。乳児院の職員が赤ちゃんを受け入れ、子宮の中に居た時のように丸くなる抱っこ、目を見つめての話しかけなど、ゆったりとしたかわりを続けました。預かって一か月が過ぎるころには、職員と目が合い、笑顔が見られ、緊張が解けて柔らかく抱っこされるようになりました。

ニコニコ笑う赤ちゃんを見て、お母さんから「なんだか顔が変わったみたい」という言葉が聞かれました。「お母さんに似て、かわいいね」と伝えると、はにかみながらほほ笑んで、「かわいい！」と言って赤ちゃんを抱き上げました。親子関係の再構築のスタートがこうして始まったのです。乳児院に預けた後、「この子に寂しい思いをさせたくない、夜中に目が覚めた時に私がそばに居てやりたい」と仕事帰りの遅い時間に迎えに来て、早朝、仕事に行く前に預けに来る日が多々ありました。子育てに悩むことも多く、「自分ばかり育てられてこなかったから、どう育てて

いいかわからない」と訴えることもあり、その都度、職員に相談しながら育児に向き合ってきました。子どもを一人前に育てるためにと専門学校にも通い、いまは資格を取って収入の安定した仕事にも就いています。「この子が私の生きがいです」というお母さんの言葉が聞かれるようになりました。

もし、このお母さんがトラウマを抱え、かわいいと思えないまま子育てを続けていたとしたら、親子の関係はどうなっていたでしょう？ 虐待が起こっていたかもしれません。お母さんは繰り返し語り、共感される中で受容され、徐々にわが子に向き合い始めました。生まれてきた子とお母さんの出会いを援助することで、親子の絆を紡いでいけると思わせてくれた事例です。（高知聖園ベビーホーム）

注 自主シンポジウム『乳児精神保健と保育学』

話題提供者：澤田敬（高知県立中央児童相談所）谷本恭子（高知聖園ベビーホーム）前野當子（元高知市立秦中央保育園）佐藤恵美子（大妻女子大学短期大学部）  
指定討論者：柴崎正行（大妻女子大学）  
企画・司会：DARLYNMPLE規子（中部学院大学）